



モラル・ハラスメントを許すな！⑩

第2の「少年A」

「京都小6女児刺殺事件」を考える(その1)



昨年12月に京都で起きた「京都小6女児刺殺事件」について、皆さまはご存知でしょうか。世間・マスコミ・専門家などがさまざまな見解を交わすなか、12月号「職場のモラハラ人間の行動と対応の仕方」について寄稿いただきました中尾さんも一考察・見解として、大変興味深い視点でお話されています。以下にご紹介させていただきます。(パピリオン編集部)「中尾相談室へようこそ」
<http://www.jiritusien.com/nakaosodansitu/>

強盗で停学になり就職が同級生に遅れて焦り、塾の正社員になりたいと願っていたロリコンの容疑者が、自分の進路の障害になると思い込んで殺した。極めて短絡的で我がままな犯行——それが、この事件のマスコミの見方だ。

精神鑑定を行って特殊な人間が起こした事件にしてしまえば、それ以上その問題の影響が波及することはなく社会は安心を取り戻すことができる——それが、これまで日本社会がとってきた方法論だった。

しかし、今やその方法論では安心を取り戻せなくなっている。個別に叩いても叩いてもモグラは出てき続けるのだ。昨今の芋づる式の犯罪の連鎖は、モグラの棲む土壌が既におかしくなっていることを示している。

では、背景に一体どのような土壌があるのか。サイト及び週刊誌から入手した複数のマスコミ記事から私が再構成した流れを元に探してみたい(＋は『週刊文春』より、*は『フライデー』より。他は新聞各紙などのWEBサイトから)。

なお本稿はあくまで、現時点で、報道されたことが虚偽ではないとして考察をすすめます。

■ 事件の概要

『奇声がつとに有名』で、『それが最近まで続いていました』という萩野家(+)。小学生の頃は、『よくトイレに閉じ込められて「助けて救急車！」って叫ぶ声も聞こえていた』という(+)。

中学生の頃から『家の中にも聞こえるほど激しい音だった』と近所の人と言うほどの『家庭内暴力』を振るいだす。中学時代の後輩は、『家庭はしつけが厳しい』と言う彼の言葉を聞いており、学生時代も『切れやすいヤツで、友だちも少なかった』と友人が話している。

大学に入ると塾のバイトをするが『目立たない先生だった』。

一方で、窃盗を繰り返しており、ついに03年6月、大学の図書館で置いてあった財布を盗もうとして逮捕。丁度、『萩野容疑者のものと思われる』怒鳴り声が出て、母親らしき人の声で「やめて」と言うのが聞こえた頃である。塾は解雇され、大学は同年10月～今年3月(1年半)の間停学となる。

その後『留置場で深く反省し』、被害者の女性に謝罪の手紙を送り、『まじめな人と感じたので、立ち直ってくれると思ったのに』とその女性は感じている。停学処分を受けた翌月から事件のあった塾でバイトを始める。

心機一転か、『大声で教室に入ってきたり、冗談を言って自分だけ大笑いしたりする姿を奇異に感じた子どももいる』。大学で彼を見かけた教授には、『早く卒業して社会人になりたい。同級生に追いつきたいという思いが見受けられた』。

塾の様子を同僚は、『ロリコンですわ。塾に来る女の子の髪型とか服装に異常に詳しく』(*)と話す。紗也乃さんも『抱きつかれそうになったりして嫌がっていた』(生徒談)。当然ながら、『成績が思うように上がらず、きつい言葉で厳しく指導』するが、『うまくいかず、夏ごろからわだかまりを持つようになった』。さらに『受け入れてもらえず自信がなくなった』。

一方、堀本さんの親からも『自慢話をよくして困る』『相性が悪いようだ』という相談が塾にあり、塾の校長と母親も数回面談している。萩野容疑者は『面談はクレームに近いと感じた』。

そして、授業が拒絶され、試験監督の交代が決まったとき、凶器を購入している。恐らくその時、『(紗也乃さんが)いなくなれば楽になると思った』『紗也乃さんがいなくならなければ、生きていけないと思った』『殺さない精神的に立ち直れないと思った』のであろう。

以上が、再構成した事件の流れである(15日時点)。

■ 「少年A」の家庭との類似性

犠牲になられた堀本紗也乃さんには、心からご冥福をお祈り申し上げます。また、私も塾に通う娘がいるのでご両親の思いも痛切に感じる。その上で書くのだが、懸命にもがいている萩野容疑者の姿も見えるのである。何に対してもがいていたのか。それを解く鍵は、次の記述にある。

まず、母親との関係。

『どれだけ叫んでも母親はほうっておくんです。興奮してるときは無視する、それが教育方針だといってました。それで、同志社までいったんだ、と』(近所の人)(+)。

『小学生の時、ケンカするとすぐに母親が出てきて「うちの子は悪くない。謝れ」って迫られた』(同級生)(*)

次に、父親との関係。

大学復学の時に学生主任と面談する際、父親は『「停学になっても就職できるのか」などと心配して』横に付き添っていた。『「校長にしかられた。ショックを受けている」と父親にこぼしていた』そして、犯行後、『血だらけの手で握り締めた携帯電話で』最初に電話をした相手が父親だった。

「あ、“少年A”の家族だ！」—私の心には「あなたの子どもを加害者にしないために」で分析した少年Aの家族が浮かんでいた。

第1に、この家庭は最も重大な“家族機能”が欠損している。家庭を“受け止め(癒しと回復)の場”にする前に“押し付け(しつけ)の場”にしてしまっているのだ。『しつけが厳しい』家庭がいつも簡単に陥る罠にこの家庭もまた陥っている。癒しとは、自分の気持ちを受け止めてくれること。回復とは、ありのままの自分に戻れることだ。それができるからこそ、外では頑張ることができるのである。

受け止めなきお“しつけ”の裏には、常に「お前はお前のままではダメだ」という否定のメッセージが含まれているため、プレッシャーを与え続けられてストレスが溜まっていくだけで自信を持つことができない。なぜ、厳しくしつけているのに子供が育たないのか、それは親のエゴを押し付けているだけだからだ。少年Aもまた、生後わずか1ヶ月で(!)しつけという針のむしろに座らせられた。

第2に、この母親は子供の“外骨格”になってしまっている。父親は子供に背骨(社会規範)を育む役割を果たす。後で書くが、この父親は社会規範として機能していない。生物が身体を支える支え方には2通りしかない。内部から支える(脊椎動物)か、外骨格で覆うか(甲殻類)である。子供に背骨が育たなければ外骨格で守るしかない。

『すぐに母親が出てきて』ということは、子供が自分でやるべきことを母親が代行しているということだ。子供から見れば、守られているようでいて実は成長のチャンスを奪われている。子供は、育つこともできずに世間を跳ね返す硬い甲殻の中に閉じ込められることになる。

背骨が通らず『フニャツとして』いた少年Aもまた、母親と言う外骨格の中に閉じこめられた。Aは、それを『石垣』と呼んだ。

第3に、この子供(容疑者)は“ディスカウント”されている。セールでおなじみのディスカウント(値引き)。その名の通り、価値を値引いて見られることを言う。日本語では「人の数(カウント)に入らない」という言葉に近い。その最悪の状態が“無視”である。受ける側から言えば、勝手にレッテルを貼られて、自分の気持ちを聴いてくれる人がいない状態である。

受け止めなき押し付けがそもそもディスカウントであるが、さらに『興奮しているときは無視する』それが『教育方針』(!)でさえあった。信念を持ってディスカウントされていたわけである。『石垣』の中に一人取り残された少年Aもまた、母親からレッテルを貼られるだけで、誰も自分の気持ちを聴いてくれる人がおらず、その孤独の中『透明な存在』になるしかなかった。

(つづく)

【家族の問題解決ナビゲーター 中尾英司】

◆中尾氏の著書「あなたの子どもを加害者にしないために」は、富士山、コムでもご購入いただけます。
「富士山、コム」<http://www.fujisan.com>

＜京都小6殺害＞萩野容疑者を起訴 弁護側は精神鑑定請求へ

京都府宇治市立神明小6年、堀本紗也乃さん(当時12歳)が学習塾で殺害された事件で、京都地検は28日、元アルバイト講師の大学生、萩野裕(ゆう)容疑者(23)＝同市寺山台3＝を殺人と銃刀法違反の罪で京都地裁に起訴した。萩野被告は「あからさまに嫌悪を示され、憎かった。この世からいなくなるようにするしかなかった」と、起訴事実を全面的に認めているという。弁護側は「(女児を殺害するしかないという)妄想に支配されていた」として、公判で精神鑑定を請求し、責任能力を争う方針。

起訴状などによると、萩野被告は今年10月10日午前9時ごろ、同市神明石塚の学習塾「京進宇治神明校」の教室内で、女児の首や顔などを出刃包丁(刃渡り約17センチ)で数回刺して失血死させた。事前に用意したアンケートに回答させる名目で直前に校内放送で他の塾生を別室に移動させ、モニターカメラの電源コードを外すなどしていた。

萩野被告は今年5月ごろ、自分が行った補習の内容について家族から苦情を受け、8月にも塾内の講師評価アンケートで女児に「授業が分かりにくい」と書かれて、塾の校長から指導を受けた。自分の印象に関する女児の言葉が頭に浮かぶようになり、凶器の包丁を購入した12月2日の直前、殺害を決意したという。

また、萩野被告は約2年前から精神科の病院に通院していたが、担当医が地検に「善悪の判断はできた」などと説明。地検は「記憶が鮮明で自分の行動をよく覚えている。社会生活も送っており、完全に刑事責任能力がある」と判断した。

一方、弁護団は28日夕、萩野被告が接見で「12月2日に女児が剣で襲ってくる姿が見えた。防ぐには相手を刺すしかないと考えた。女児との関係に悩んでいたが、仕返しをする気はなかった」と話したことを明らかにした。また、11月22日と12月1日に精神科を受診して「入院させてほしい」と要望したといい、弁護団は「根本的に妄想に支配されていた。精神鑑定で動機を解明する必要がある」としている。

また、弁護団によると、萩野被告は当初は人が少ない土曜日の3日に殺害を計画したが女児が登塾しないことが分かり、10日に遅らせていたという。 【太田裕之、野上哲】
(毎日新聞- 12月28日21時59分更新分より)